



教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 18
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成30年(2018)9月1日

目次

- 学士課程教育のさらなる充実をめざして
—平成29年度「FD推進助成事業」成果報告会開催レポート— p.2
- 平成29年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」受賞者のことば p.4
- 國學院大學LLCにおける英語ファカルティ・デベロップメント(FD)
ワークショップを振り返って..... p.6
- データは語る (3)
—学修相談データベースから見る大学生の英語ニーズと現状—..... p.8
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力！学生のまなざし！（18）—」 p.11
基礎日本語：成田信子(人間開発学部教授)・鈴木道代(教育開発推進機構助教)
- 名著探訪 —高等教育、この1冊（第10回）—..... p.14
- 教育開発推進機構彙報..... p.15
- ぞったくどうじ
● 啐啄同時 —編集後記—..... p.16

もっと日本を。もっと世界へ。

学士課程教育のさらなる充実をめざして 平成29年度「FD推進助成事業」成果報告会開催レポート



第2回目となる「FD推進助成事業」成果報告会が、平成30年2月21日に1号館4階1403・1404教室で16～18時に開催されました。この報告会は、教育開発センターが主催する当該年度の「学部FD推進事業（学部単位で組織的に取り組む、教員の職能開発に関するプロジェクト）」と、「グループによるFD推進事業（学部学科の枠にとらわれない、2名以上の専任教員で実施される教育・学修の成果向上を目的としたプロジェクト）」に関して、その取り組みから得られた知見を広く学内教職員で共有することを目的に実施されています。

今年度は、昨年度の経験を踏まえて、分科会方式での実施となり、両分科会合わせて44名の教職員が参加しました（前年度は22名）。以下、「学部FD推進事業」「グループによるFD推進事業」の順に、当日の様子をご報告します。

■分科会A（1403教室） 司会：戸村 理
〈平成29年度「学部FD推進事業」報告〉

学部	タイトル
文学部	カリキュラム及び授業改善の基本方針検討
法学部	法学部におけるアクティブ・ラーニング導入に向けた初年次教育の手法の研究
経済学部	基礎演習 A・B における FA 制度を用いた授業改善
神道文化学部	学生に対する効率的なアンケート・学力調査による授業運営・学部運営の改善化
人間開発学部	「人づくりのプロ」を育てる学部教員の実践的指導力の自己開発—学校インターンシップの現状と課題の把握—

当日は、前述の表にある採択事業一覧の順にしたがって、各学部から15分の実践報告と5分の質疑応答が行われた。各学部の実践報告は、個別の授業科目から複数の科目群、さらにはカリキュラム全体の改善や教育理念にまで焦点を当てたものなど極めて多様であり、その知見も全学で共有可能なものから、当該学部固有の文脈が強く関与しているものまで、多岐にわたるものであった。改めて本学学士課程教育の授業改善においては、さまざまな見地から検討することが必要であると認識することとなった。紙幅の都合から、以下では法学部と人間開発学部の取り組みについて報告しておく。

法学部ではこれまでの「教育の質保証体制の構築（PDCAサイクルの実施的稼働）」の実施を受けて、平成30年度より新カリキュラムを実施するはこびとなった。それを受けて今年度のFD推進事業では、初年次教育において効果的なアクティブ・ラーニングを導入すべく、入門科目の具体的な制度設計の検討が行われた。当日はアクティブ・ラーニングの効果的導入及び授業外学修の確保と授業内学修の高度化を同時に成し遂げるため、反転授業教材を目下、急ピッチに作成しているとの報告があった。作成に際して、動画撮影に苦労しているとの感想や、学生の授業外学修時間をどうやって確保するかなどという「リアルな声」を聞くことができたのは、極めて有益であった。実践的課題をめぐって、教員間で共有と協議が行われているとの報告もあり、それはまさに本事業が期待しているところであった。

人間開発学部では、教員養成に携わる学部教員の実践的指導力の自己開発を目的に、学校インターンシップの現状と課題について、学内の教員が広く共有する機会が設けられている様子について報告がなされた。2度のFD協議会の実施、そして他大学へのヒアリング調査を行い、授業改善におけるgood practiceを組織的に蓄積・共有するシステムを創り上げてい

る実態が明らかになった。人間開発学部では、今後、学校インターンシップが教職課程の中核を成すものと想定しており、行政に先んじて質の高い教員を輩出するため、不断の授業改善を行おうとする高いモチベーションがあることが改めて示された。

■分科会B（1404教室）司会：小濱 歩
 〈平成29年度「グループによるFD推進事業」報告〉

報告者	タイトル
成田信子教授 (研究代表者)	学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発（学部・学科横断型）
藤本頼生准教授 (研究代表者)	神道教化関連授業の改善およびアクティブラーニング化にかかる教材開発事業（神道文化学部 神道文化学科）
根岸毅宏教授 (研究代表者) 齊藤光弘助教 矢嶋剛兼任講師	アクティブラーニング型授業における教員と学生との間の教育成果のギャップの確認およびルーブリックの作成（経済学部）

平成29年度から開始され、初の成果報告となった「グループによるFD推進事業」は、学部・学科の枠にとらわれない、特定のテーマのもとに集った教員グループによる取り組みを対象とする。それ故、本年度の3件の報告は、いずれも、担当教員による調査・検討に基づく特定授業の開発・改善の取り組みと、具体的な授業実践の現場との間での往還を反映したものとなっていることが特徴的であった。

成田信子人間開発学部教授を研究代表者とする事業は、共通教育科目「基礎日本語」の授業方法・教材開発を行うものである。FD研究会での議論と、初年次教育・言語関連科目の先進的取り組み調査を踏まえて、「基礎日本語」科目のシラバスの改訂と、授業で使用するルーブリックの検討を進め、平成30年度使用教科書の原案を策定したことが報告された。また、受講者へのアンケート調査に基づきつつ、教員の期待と学生のニーズとの間の齟齬の検証がなされたことや、学生が他の学修においても活かされると特に実感している内容として、文章表現技術（文章の書き方、およびその下位項目としての論理・構成・引用等）が最多であったこと等が述べられ、これらの結果をフィードバックしつつ、更に取り組みを進めて行くとの展望が述べられた。

藤本頼生神道文化学部准教授を研究代表者とする事業は、複数の神道教化関連科目の教材開発・授業改善を進めるものであり、同科目によって現代社会における神社の位置づけとその公共性を認識せしめるとともに、それらを学生の実践的な目標意識や汎用的能力の向上へと有機的に関連させて行くことを課題として念頭に置いている。報告に際しては、アクティブ・ラー

ニングに係る調査研究とその実践、受講者が執筆した小レポートの内容に基づき編成されたグループによるワーキングの試み、またその内容の冊子形態での刊行といった取り組みが紹介された。また、これらのアクティブ・ラーニングの実践過程で認識された様々な課題についても報告がなされ、学部独特の科目における授業実践でありながら、他の学部でもその知見を共有し得る内容となっていた。

根岸毅宏経済学部教授を研究代表者とする事業は、アクティブ・ラーニング型授業を実践する「経営学特論（ビジネスデザイン1）」「経営学特論（リーダーシップ）」を対象として、学修成果の確認と、評価基準（ルーブリック）ならびに教育手法（コーチング）の開発・改善を行う取り組みである。

根岸教授による全体説明の後、まず矢嶋剛経済学部兼任講師からは、「経営学特論（ビジネスデザイン1）」における学生の教育効果を把握する試みが報告された。学生の自己省察を分析する中で、「自分を変えた能動的な活動（アクティビティ）」が得られた事例に特に注目しつつ、これらの効果的なアクティビティを能動的教育の目標として設定するとともに、その事例データを教育効果向上のための基礎的資料として用いることの可能性が提示された。

続いて根岸教授より、「経営学特論（リーダーシップ）」の授業実践に基づき報告がなされた。学生が複数回にわたり作成したレポートの分析を通して、学修内容の授業外での実践・自ら発見した課題の克服・成長感の獲得といった事例を観察し得たことから、リーダーシップが教えることで身につくものであるとの認識を新たにしたこと、その結果をルーブリックの作成に反映したことについて説明がなされた。

更に、齊藤光弘経済学部特任助教からは、これらの科目における授業目標の明確化と、教育手法の開発について報告がなされた。前者については業者の支援を受けつつルーブリックを作成する取り組みを通して、授業目標の明確化に加え教員間のコミュニケーションを促進できたこと、後者については同業者の開催するコーチング研修の受講によるスキル習得が成果として挙げられ、これらを今後の授業実践に反映するとともに、授業をサポートする学生スタッフやグループリーダーに対してもスキルを移転して行くとの展望が述べられた。

以上ご紹介した学部・グループそれぞれの取り組みの詳細については、近日公開を予定している「成果報告書」に譲ります。なお、今年度の成果報告会における問題点としては、特に参加者数の少なさということが挙げられます。前年度より22名増とはなりましたが、本学の規模では少なすぎると言わざるを得ません。事実、参加者からそのような声も寄せられており、今後、より多くの教職員が参加できるよう、対策を講じていきたいと考えています。（戸村・小濱）

平成29年度「学生が選ぶベスト・



前列左より、長浜尚史先生・三遊亭遊吉先生・久保哲也先生。後列左より、赤井益久学長・柴崎和夫教育開発推進機構長

國學院大學では、例年「学生による授業評価アンケート」結果に基づいて、優れた授業実践を行っている専任・兼任教員を表彰する「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」を実施しています。平成29年度の受賞者は、「到達目標の達成度」と「授業に対する総合的な満足度」の二つの基準に基づき、3名の先生方が受賞されました。平成30年3月29日に表彰式が開催され、柴崎和夫教育開発推進機構長から挨拶の言葉が述べられたあと、赤井益久学長よりそれぞれの先生方に正賞・副賞が授与されました。表彰式では先生方の授業への取り組みや、本学の学生についての印象など、様々なお話を伺うことができました。ここでは、受賞者の先生方からのコメントを紹介させていただきます。

久保 哲也 先生（本学兼任講師）

この度は「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」という身に余る賞をいただき、大変嬉しく思っております。光栄でありますと共に身が引き締まる思いです。評価をしていただいた学生の皆さん、日頃より大変お世話になっております先生方、事務の方々に厚く御礼申し上げます。受講していただいた学生の運動意欲が非常に高く、またキビキビとした行動や仲間に技術を教え合っている姿に大変気持ちの良い思いをしました。

人間開発学部の学生が対象でしたので、教員というよりは、先に生きてきた先輩、教職に携わらせていただいている先輩として授業を行ってみよう、接してみようと意識しました。そのため20数年前に私自身が教育実習中に教わったことを伝えさせていただきました。「先生は黒子に徹しなさい」、「屋外で集合する時は生徒が眩しくない方向で」、「先生は襟のあるシャツを着なさい」「インフォメーションは短く」…等々。どう判断するかは学生次第ですが、頭の片隅にでも残ってくれていると嬉しいです。

今後も安全第一、楽しさ、運動量の確保、技術向上、コミュニケーション能力や協調性が育まれるような授業になるよう意識しながら、学生と共に成長できるよう精進して参ります。

「ティーチング賞」受賞者のことば

長浜 尚史 先生（本学兼任講師）

この度は、前年に引き続きの受賞、大変光栄に存じます。私は「スポーツ実技」という授業を担当しています。実は、昨年度よりたまプラーザから渋谷に教場が変更され、受講生も様々な学科に所属する教職希望の学生に変わりました。そのために、扱う題材や展開の仕方など授業内容をかなり見直さなければならず、したがって、今回の受賞はその取り組みが学生から評価されたということで、私も大変嬉しく思います。今年度も昨年の内容をベースに、さらに改良しながら進めているところです。

身体活動を伴う「スポーツ実技」の授業では、他者とのコミュニケーションが大切であり、そこでは、言語はもちろんのこと、非言語（動作や表情など）も使いながら互いの意思や感情を伝え合っていきます。また、技術向上や戦術理解といった諸課題を解決するため、自身で試行錯誤を繰り返すのですが、その過程で学生同士が教え合うことも度々見られます。私は、このように学生が主体となり、互いに関わり合いながら活動していく授業運営を心がけています。そして、受講生にとってもこうした体験は、将来教員になった際に生きてくるものと信じています。引き続き適切なコーチングを心がけ、授業を担当してまいります。

三遊亭 遊吉 先生（本学兼任講師）

この度は、ベスト・ティーチング賞を頂きまして有難度うございます。

大学を卒業して三十六年、はなし家になってまさか母校で講師をするとは夢にも思いませんでした。

お世話になって九年目になると思います。私が、大学生に講義が出来るのか、講師を引き受けていいのか悩んだ事を覚えています。若い学生さんに接して何か得るものがあればと引き受けたのはいいのですが、私が成績をつけていいのか、これも悩みました。基本的には、全員にいい成績をつけるといいながらも、落語には、オチが付きものなので落とす人もいるかもしれませんというような事を言って講義を始めました。

私の時代もそうでしたが、おもしろい先生の授業は、今でも覚えています。また、結構、さぼっても単位を頂いた先生もいます。学生さんが気軽にと言うと語弊がありますが、楽しい時間を過してもらえたらと思っています。

学生さんの人数もわりと多くて、月曜日の一限にしては、出席率も良かったと思います。まじめな学生さんが多いように感じます。

私の話は、雑学のようなものですが、社会に出ると雑学も役に立つことも多いと思います。学生時代は、もちろん勉強第一ですが、大いに大学生活を楽しんでほしいです。また、これを機会に寄席の方にも是非足を運んで頂ければ幸いです。生の日本のいろいろな芸能を見聞きしてください。

昨今、いろいろ話題もあるなかで、自分の母校を誇りに思って、私も母校に感謝です。

有難度うございました。



國學院大學LLCにおける英語ファカルティ・デベロップメント(FD)ワークショップを振り返って

松岡 弥生子 (教育開発推進機構准教授)

國學院大學教育開発推進機構ランゲージ・ラーニング・センター(LLC)では、本学の英語教育の充実と教員の能力開発を目的とし、Japan Studiesの教員を対象に、平成26年度より、「英語による授業のためのファカルティ・デベロップメント(FD)ワークショップ」を実施してきた。Japan Studiesは、日本の文化、経済、歴史などを英語で教えるユニークな科目で、海外からの留学生と本学日本人学生とが一緒に学んでいる。教えているのは、各専門分野の日本人教員と英語ネイティブの教員である。第1回目英語FDは平成26年度前期に実施された。2回目以降は、外部から英語教育分野の専門家を講師として招聘し、毎回異なるテーマに基づいて講演と参加型ワークショップを合わせた形で開催された。ここでは、LLC担当の本学教育開発推進機構の専任英語教員として筆者が着任以降に行われた、平成27年度から29年度までの回について、その実施と内容を振り返ってみたい。

〈平成27年度〉



▲平成27年度(第2回)ワークショップ風景

平成27年度(第2回)ワークショップは、「英語で日本文化を教えるために一語学力と事前知識の個人差への対応」と題し、平成28年2月下旬に開催された。ワークショップのテーマは、英語ネイティブ、非英語ネイティブ、そして一般の日本人学生の英語力や背景知識のギャップという問題を反映したものであった。講師は、恵泉女学園大学人文学部英語コミュニケーション学科教授のケン・フジオカ氏である。氏は、ナイジェリアのラゴスに生まれ、後に日本で長く英語教育に関わる前は、アメリカ、トルコ、タイ、ブラジルなど世界諸国で言語教育に携わっ

た。こうした体験は、氏のグローバルな世界観の基となり、研究分野である国際コミュニケーション学や日系アメリカ人史研究のバックグラウンドになっている。レクチャーは英語で行われ、恵泉女学園大学や他大の英語授業において、能力差のあるクラスの運営を円滑でアクティブなものにするためのグループワークや学生同士の助け合い、英語ゲームなど、様々な工夫や活動が紹介された。講演の後、参加者は2,3人のグループに分かれて、講師の用意した英語のカードゲームやクイズなど、実際に授業現場で使用可能なアクティビティを、学生の立場に立って体験し、講師と参加者の間で熱心な質疑応答も行われた。最後に、Japan Studies担当教員による、プログラムの問題点に関する内部ディスカッションの時間が取られ、熱を帯びた議論が行われたが、問題の大部分は教育システムに因るものであり、学科コンテンツを外国語で教える授業の難しさを改めて考える機会となった。

事後アンケートによると「自分の教育メソッドの向上にとっても役立つ」、「自分のクラスに『学生による自己評価』を取り入れたい」、「英語による授業に限らず、PBLの実践方法として参考になるアイデアが惜しみなく紹介され、大変有意義だった。」といった、好意的な声が多く聞かれた。

〈平成28年度〉



▲平成28年度(第3回)ワークショップ風景

第3回は、前年と同要領で平成29年2月に行なわれた。テーマは、「学修者中心の英語授業アプローチ」であった。東海大学国際教育センターのマーク・シュロズブリ准教授により、「student-centered second language teaching」(学習者

中心の第二言語習得の教授法)の理論とケース・スタディーを紹介するレクチャーが、参加者とのディスカッションも挟み、行なわれた。彼の研究分野は、カリキュラムデザイン、教授法、教材開発など多岐にわたり、University Materials BankやMoodleなど東海大学内オンラインツールの英語授業への利用も積極的に推進している。今回は、同大学の英語プログラムの中から、「技術英語」、「科学技術プレゼンテーション」、「グローバル問題」の3コースについて、プログラムや、クラス・アクティビティの様子などが、写真や動画も使って紹介された。それらの授業では、グループ単位での活動、特に口頭発表の機会が多く与えられ、学生は自ら選んだテーマで英語のプレゼンテーションを行うなど、学習者の活動を中心として動くクラスの様子が伺われた。また、一連の問題の解決策として、科目知識や内容の修得にフォーカスしたCBTや、言語と科目内容の両方を融合したCLILの教授法・理論にも言及した。

後半では、参加教員が、それぞれの英語授業の中でどのように「学習者を中心とするアプローチ」を実施しているかについて英語でミニ・プレゼンテーションを行った。事後アンケートからは、「この研修会を楽しんだか」、「内容は興味深かったか」、「レクチャーは分かり易かったか」、「自分の授業や教育に役立つと思うか」等の項目すべてに、肯定的な結果がみられた。

〈平成29年度〉



▲平成29年度(第4回)ワークショップ風景

第4回目は、「リフレクティブ・ティーチング」(Reflective Teaching)をテーマとして、文教大学文学部英米語英米文学科准教授、渡辺敦子氏を講師に招いて平成30年2月に行われた。リフレクションとは、「振り返り」「省察」「反省や熟考」「影響」などと訳することができ、「教師の省察からより効果的な授業開発をすること」をめざす方法である。近年、リフレクションは、教員が教師としての成長を促す鍵として、教師教育の分野で注目される研究であり、渡辺氏はその数少ない研究者のひとりである。ティーチング・スキルや汎用的メソッドとは別に、教育を執り行う教員自身の意識や自己啓発は、教育効果の上で大きな意味を持つ。リフレクションは、どのような授業にも可能だが、実際に授業改善に役立てる為には、其々の授業に適合し

た振り返りの形を教師自身がを見つける必要がある。

この回のワークショップでは、使用言語と進行に関して以前と異なる点があった。前2回は、講演もディスカッションも英語のみで行われ、参加対象は英語による授業運営を担当している教員に限られる形となった。しかし、第4回目からは、日本語を使用して実施することで参加者を増やそうという意見が出され、講師はバイリンガルであったが、ワークショップは日本語で行われた。その結果、英語を専門領域としない教員からも数名の参加がみられた。しかし、英語の教授法や理論を扱う英語FDの特質から、英語コンテンツを含むことが否めず、使用言語については、引き続き検討が必要である。

ワークショップの進行に関しては、前半を講演、後半をディスカッションやアクティビティとするこれまでの流れとは違って、今回は、参加者全員でのタスクがまず会の冒頭で行われた。講師の用意したパネルには、ブリューゲルの絵が参加者には見えないように貼られた。参加者は2つのグループに分かれ、レポーター役の人が絵を見てきた情報をグループに伝え、ペインター役がその絵を再現する、というのがタスクである。役割を交替しながら絵が完成した後、全員でのディスカッションとなり、タスクを行った時の感想や問題点を振り返って話し合うことで、実際に「リフレクション」を体験した。これにより、何をどのように振り返るのかなど、リフレクションの捉え難い側面を学ぶことが出来た。

事後アンケートの結果、「このワークショップを楽しむことができたか」「テーマや内容は興味深いものだったか」には、回答した全員が、「そう思う」または「ややそう思う」と答えた。「レクチャーは分かり易かったか」と「自分が教える時に助けになると思うか」においても同様の結果が得られ、「あまりそう思わない」や「そう思わない」は無かった。自由記述では、「非常に興味深い、よかった」、「大変おもしろかった」という肯定的な意見や、「理論としては分かったが、実際の自分の授業にどう落とし込むかこれから考えなくてはならない」といった意見もあった。又、英語でなく日本語で行ったことについて、一考を促す意見もあった。

〈さいごに〉

Japan Studiesは、英語ネイティブと非ネイティブの教員が混在するため、双方の希望に叶うテーマでFDワークショップを実施することは非常に難しい。例えば第4回のような認知・社会言語学的テーマは、英語使用上の問題とは無縁の外国人教員には歓迎されるが、英語で授業をすること自体に労力を費やしている非ネイティブ教員にとっては、もっと実践的な“英語トレーニング”の方が望まれるかもしれない。そうした中でも、このようなFDの活動を通して、同じプログラムの教員同士が話し合う機会を持ち、学外の専門家から様々な事例や知識を学び、日ごろの授業の改善に役立てて頂ければ、幸いである。

データは語る

—学修相談データベースから見る大学生の英語ニーズと現状—

教育開発推進機構准教授 松岡 弥生子

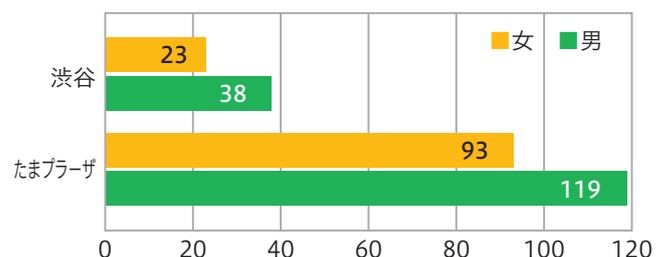


國學院大學ランゲージ・ラーニング・センター (LLC) では、学生の英語学修の様々な問題や悩みに対応し、より良い学びをサポートするため、渋谷キャンパスとたまプラーザキャンパス LLC YOKOHAMA OFFICE の両方で其々週二日、専任の英語教員による「英語学修相談」を行っています。相談セッションは個別対応で行われ、相談の内容は“アドバイジング・データベース”に記録されています。平成26年度の LLC 開始当時は紙面の記入用紙を保存していましたが、平成27年度頃より、オンラインのデータベースとして共有フォルダに保管しました。これにより、同じ相談者が再び来た時すぐに以前の状況を確認したり、学修者全体の傾向を把握するなど、きめ細かい支援に結び付けることが可能になり、別のキャンパスに居る教職員もデータにアクセスし確認ができるようになりました。学修相談の項目には、相談者の氏名、学年、学科、性別などの他、大枠の相談内容、対応内容の詳細メモ、対応時間、紹介した教材、外国語オンライン学修教材の利用、次回の予定など24項目が含まれます。今回は、平成29年度の学修相談データから、学生の英語ニーズと現状を読み解きます。

<相談の内容とは？>

まず、相談者の人数と男女比を、渋谷とたまプラーザの両キャンパスについてまとめた図1を見てみましょう。それによると、1年間に、渋谷で61件、たまプラーザで212件、計273件の学修相談がありました。たまプラーザの件数が圧倒的に多い理由は、たまプラーザには、渋谷にはない外国語学修専用の学修スペースがあり、英語教員が在室している日なら、予約無しに訪れてもすぐに相談や話し合いが出来るため、と思われます。男女比では、渋谷では全体の約25%、たまプラーザでも12%ほど男性が女性より多めです。同年度の学部合計学生数を見ると、男性(5,874人)が女性(4,515人)より14%

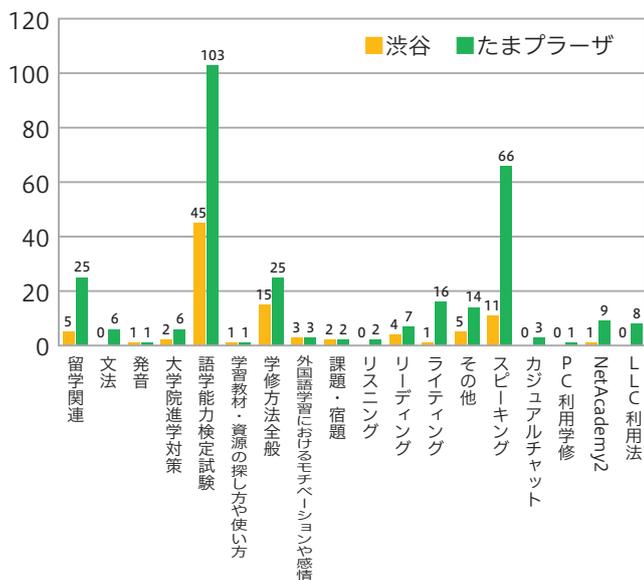
図1. 平成29年度 渋谷とたまプラーザの男女別の英語学修相談件数



ほど多いのですが、たまプラーザでは、主な対象である人間開発学部は男性が635人、女性が777人と女性の人数が多いことを考慮すると、女性の相談率がやや低いようです。

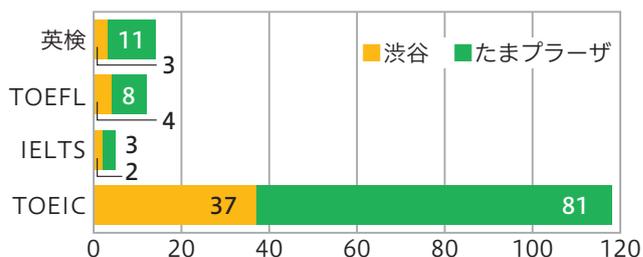
では、実際にどのような相談があるのでしょうか。主に担当科目の内容に対応する“オフィスアワー”とは違い、学修相談は、英語の勉強方法全般、TOEIC等の検定試験、英語学修のモチベーション、留学準備の英語など、実に広範囲な内容を扱います。当データベースでは、“大枠の相談内容”18項目を設定し、その中から1又は2項目を相談ごとに当てはめています。図2は、たまプラーザと渋谷における大枠の相談内容と件数です。これによると、たまプラーザでは、語学能力検定試験に関する相談が103件と圧倒的に多く、次いでスピーキングに関するものが66件、3番目は学修方法と留学関連で共に25件という結果です。渋谷でも語学能力検定試験の相談が一番多く(45件)、次に学修方法(15件)とスピーキング(11件)の相談が上位を占め、その次に、留学関連(5件)やリーディング(4件)も見られます。

図2. 平成29年度 渋谷とたまLLCにおける英語学修相談の大枠の内容と件数



また、当データベースには、“対応内容の詳細メモ”という項目を設け、相談者からの具体的な話の内容に加え、教員からの提案、アドバイス、見直しなどの詳細を記入しています。一番多い相談内容である「語学検定試験」の“相談メモ”を見ると、TOEICに関する相談が両キャンパス合わせて118件と多数を占め、TOEFL、IELTS、英検など他の試験は非常に少ないことが分かりました(図3)。TOEIC関連の相談には、主に次の様なものが含まれます。

図3. 学修相談の英語検定試験の種類と件数



- ・ TOEICの勉強法や教材を教えてください。
- ・ 英語が不得手だが、TOEICの受験や勉強は可能だろうか。
- ・ TOEICのスコアを上げたい。
- ・ リスニング、リーディングの力をつけたいが、どうすればよいか。
- ・ 就職との関連や留学に必要な基準スコアについて知りたい。
- ・ 試験結果の分析の依頼、スコア上昇の報告と御礼(または失敗と悲嘆)など

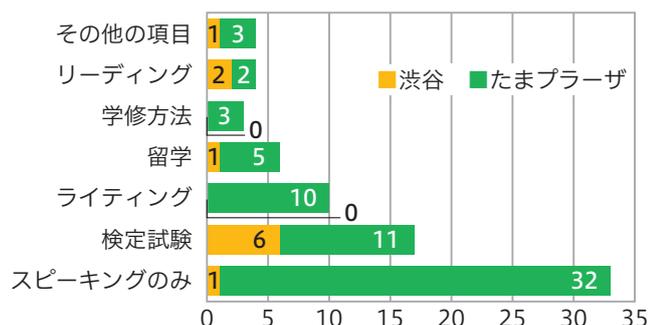
多くの学修者は、一つだけでなく、複数のトピックに関連して学修のアドバイスを求めてきます。図4は、「学修方法」と関連して相談された他のトピックを表したグラフです。それを見ると、たまプラーザでは、TOEICなどの検定試験と合わせて「英語の学修方法全般」を相談しているケースが、26件中10件と一番多く、学修方法全般のみの相談も8件あります。ほかに、留学、オンライン教材の利用法、スピーキングスキルなどに関連した相談も其々2～3件あります。一方、渋谷では、15件中13件が、学修方法と英語検定試験を絡めての相談であり、学修方法全般のみの相談は2件、そのほかは0という結果でした。渋谷の学生は、TOEIC講座にも大勢の参加があるように、英語検定試験への関心が高く、就職を見据えて真摯に取り組もうとする姿が目立ちます。

図4. 学修方法と関連して相談された項目



また図5は、「スピーキング」と関連して相談された他のトピックを示しています。スピーキングに関する相談は、たまプラーザでは66件と二番目に多く、そのうち32件はスピーキング・スキルのみ、11件は英検二次

図5. スピーキングと関連して相談された項目

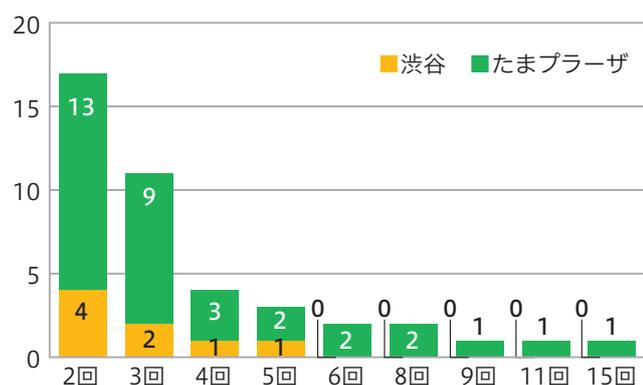


試験や教員採用試験の面接など英語の試験に関連するものでした。スピーキングだけの相談では、「スピーキング上達の良い方法を教えて欲しい」という質問がよく聞かれますが、「英語を話せるようになりたいけれど、そのために辛い英語の勉強はしたくない」と考えている学修者が多いようです。スピーキングとライティングの組み合わせが10件ほどありますが、これは、話すための英文構成能力を鍛えるためにライティングも同時に学ぶように、本教員からアドバイスしていた結果です。渋谷でのスピーキングの相談は、たまの6分の1に当たる11件と少なく、「詳細メモ」によると、その殆どが英検やIELTSなどの4技能検定試験対策と関連していることが見受けられました。

<学修相談から個別学修へ>

さて、LLCでは、学修相談に複数回来るリピーターも多くいます。図6は、平成29年度の学修相談のリポート回数（2回以上）を調べたグラフです（図6）。学修相談に来た相談者のうち、たまプラーザでは34人、渋谷では8人がリピーターとしてアドバイスを得ていることがわかります。リポート回数2回の相談者が、両キャンパス合わせて17人と最も多く、次に3回が合計11件、さらに4回が4人、5回が3人という結果です。6回以上のリピーターは渋谷には一人もいませんが、たまプ

図6. 学修相談のリポート回数（2回以上）と人数



プラーザでは、8回、9回、11回と足を運んでおり、最大では15回も学修相談を利用している学修者も1人います。これもやはり、たまプラーザには、自由に学修できるスペースと質問できる教員がいることのメリットでしょうか。こうした熱心な学修者は、学修相談をきっかけに、学修そのものの指導を希望するケースが多くみられます。LLCでは、学修相談と並行して、「個別の英語指導」もおこなっており、29年度は、主に下記のような内容を扱いました。

- ①個別または小グループでの英会話
- ②英語4技能試験のための口頭練習
- ③留学の準備のための会話練習と英語ライティング
- ④3、4年生の英会話と英語ライティング（英語授業単位修了者のため）
- ⑤大学院入試のための和訳とライティング

個別の英会話（①）は、「オンデマンド英会話」という名前で、簡単な自己紹介からはじめて徐々に進めていくため、ネイティブとの英会話の準備として利用する人もいます。②の口頭試験の練習は、英検、他の4技能試験、TOEIC Speakingなどのテストに対応し、これまで殆どの学修者から、本番で首尾よく出来たと報告をうけています。③と④は、準備したテーマについて英語で平易な文章を書く訓練と、それについて口頭で話す練習とを織り交ぜておこなっています。④は英語授業単位修了者が主ですが1、2年生の参加もありました。⑤は、国内の院試の準備としては和訳を多く取り上げています。これらの活動は、学修相談と同時でない場合、特にたまプラーザでは、アドバイジング・データベースには記入せず、来室者データベースに記録しています。

<まとめ>

外国語学修相談は、一斉授業では対応しきれない学修者の悩みや問題への対処を、専門知識のある教員と一緒に考えて解決するための取り組みです。特に多かったTOEIC試験対策に関しては、「TOEICの勉強法」、「TOEICモチベーションシート」などを開発して相談時以外でも手に取れるように配置しています。学修相談は、本学のたまプラーザと渋谷の両キャンパスで実施していますが、学修環境が整っているたまプラーザでは相談者の人数も多く、幅広く複合的な内容の相談になっているようです。紙面の都合上、件数の少ない相談や詳細な事項に触れることはできませんでしたが、「学修相談」という人的な教育サポートが、大学生の皆さんの英語学修に役立つことを望んでいます。

大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（18） —



全学部学科に提供される共通カリキュラムである共通教育プログラム。その中の「基礎日本語」は、大学生として身に着けるべき日本語運用能力の向上を目指す科目ですが、担当教員はFDにも積極的に取り組み、不断の努力がなされています。今回は、基礎日本語の取り組みを紹介します。

教員の授業努力



「基礎日本語」の
授業展開
— 大学生の書く力を育てる —

成田 信子
(人間開発学部教授・「基礎日本語」科目管理責任者)

大学の学修が高等学校までの学習とかなり違うのは、学部学科で専門的な内容の授業が行われ、学生自身に講義や演習から学び取る力が要求されることである。学習者の自己学修能力と言い換えてもよい。入学してくる学生を見てみると、この自己学修能力は、入学時にすべて

の学生に備わっているものではなく、初年次から2年次くらいまでの間に徐々に身に付けていくものだと感じる。学生によって身に付ける速度や方法はさまざまであろうが、國學院大学の共通教育には、個々の学生が自己学修能力を身に付ける一助となる科目が含まれている。「基礎日本語」もその一つであり、毎年学部学科を問わず500名程度の学生が履修し、大学で学ぶための日本語運用能力を身に付けようとしている。

平成29年度から30年度にかけて「基礎日本語」の内容や教授方法の大幅な見直しを行った。科目管理責任者という立場で、科目担当者によるFDで実践を共有し、新訂版の教科書を作成した。改訂のかなめは表現に必要な論理的思考力である。日本語運用能力である「書くこと」「話すこと」等OUTPUT型の能力の育成には実は思考力のかかわりが大きい。改訂「基礎日本語」では、

OUTPUTの前段階の「問いをもつ」「課題を解決する」「論理的に組み立てる」等の力に重点を置いている。

取り上げる文章の種類も増やした。29年度まで立場をはっきりさせて意見を述べるために、主にYESorNo型小論文をとりあげていたが、今期から<読解型レポート><調査型レポート>を導入した。学生の様子については次の原稿で紹介されるが、自ら考えを生み出し深めるところにターゲットが移り、ハードルは上がったかに見える。教科書から<読解型レポート><調査型レポート>の説明と書き進めるプロセスを紹介する。

〈読解型レポート〉

文章を読んで中心をつかみ、文章が提示している問題点について自分の意見を述べる形のレポート

「基礎日本語」での〈読解型レポート〉作成の手順

- ① A社の社説を読んで、300字程度に要約する。
- ② 同テーマのB社の社説を読んで考えたことを他の人と交流する。
- ③ A社・B社の社説ならびに他の受講生との意見交流をもとに、自分の意見をもち、構成を考えて400字程度の〈読解型レポート〉を書く。

〈調査型レポート〉

あるテーマのもとに、自ら問いを設定して、解決のために調査を行い、調査結果をもとに自分の主張を組み立て記述する形のレポート

「基礎日本語」での〈調査型レポート〉作成の手順

- ① テーマ例をもとに問いの立て方を学び、社会的なテーマに対して自ら問いを設定する。
- ② 図書館、データベース、インターネット等で調査を行う。(課題)
- ③ 調査結果の引用・剽窃について学ぶ。
- ④ 調査結果を2つ以上引用して根拠とし自らの主張を組み立て、構成を考えて1000字程度の双括型で記述する。
- ⑤ グループによる読み合わせと推敲。

「問いをもつこと」がかなり重要だと感触を得ているが、教授方法については引き続きFDを通して実践的に検証を行っていく。「基礎日本語」の授業が思考を鍛え、文章に表す場として機能していること、さらに専門科目での学びに汎用的能力として生きてはたらくことを願っている。



「基礎日本語」の 授業展開 —教室の現場から—

鈴木 道代

(教育開発推進機構助教)

「基礎日本語」の授業は、大きく分けて二つのパートに分けて行っている。一つは、大学の学修として基盤となる論理的な思考力を養成する小論文やレポートの作成である。二つは、國學院大学の学生として身につけておきたい教養としての日本語を学ぶということである。

本年度より小論文とレポートとの作成については、次のようなプログラムで行っている。

- ① YESorNo型小論文 (600字)
- ② 読解型レポート (400字)
- ③ 調査型レポート (1000字)

また「教養としての日本語を学ぼう」では、文章を書く作法を学ぶため、敬語の基礎知識、ビジネスメール・手紙の書き方を行っている。

これらの授業では、「『基礎日本語』を学ぼう～国語力向上をめざして」という、ワークシートを付した「基礎日本語」科目独自のテキストを使用し、グループワークを取り入れた授業を行っている。たとえば、① YESorNo型小論文では、「小学生にスマートフォンは必要か」というテーマのもとに、学生同士で必要か不要かについて、各自の意見を理由と共にグループ内で出し



合った上で、挙がった意見に対する反駁意見を議論している。また、③調査型レポートでは、グループワークにおいて、学生自身がそれぞれ執筆したレポートを発表した上で、読み合わせを行い、互いのレポートに対するアドバイスを言ったり、評価シートを使用して評価しあったりするという授業内容を盛り込んでいる。

このように、教員对学生という一方向の関係だけでなく、グループワークによって、学生同士が他者と意見を交換し共有することで、単に教員から教授するという授業の形から、複数の人間との交流によって、多角的な視点を得られることが期待できる。学生自身がクラスの仲間との近い関係の中で互いに触発し触発されることで、自発的な気づきや、能動的に授業に参加することが可能になると思われる。

ただ「基礎日本語」を複数クラス担当した実感として、授業内でのグループワークはグループの組み合わせ、クラスの雰囲気などの違いにより、常に予測不能なライブ的要素が強いので、場合によっては、なかなか意見が出なかったり、議論が深まらなかったりするなど、均質な授業を行うことの困難さは感じている。

この「基礎日本語」科目は複数の教員で行っている授業でもあるので、均質な授業を行うことは、学生の満足度を向上させるという点において、重要な課題となるだろう。この点については、クラスごとの授業作りを考える上で、個々の学生の現状を配慮するという個別対応を行い、クラス全体でスキル向上を目指そうという意欲を高めるようなクラス全体の雰囲気作りを考えた授業展開が必要であると思われる。



学生のまなざし

基礎日本語の授業を受けて

大熊功太郎さん（法律学科法律専攻 2年）

この授業を受け私が一番に感じたことは、すぐに大学生活に活かせるということでした。例えば毎回の授業の始めに行う漢字テストでは、なかなか普段触れていなかったため失念してしまっていた漢字を思い出すことができ、さらに教養としての熟語や慣用句なども学ぶことができました。敬語の授業では話すだけの敬語だけでなく、今後就職活動や、仕事に就いた際に必ず使うであろう、正しいメールの送り方、正しい手紙の書き方なども学ぶことができました。そして、この授業を受ける上で私が一番ありがたかったことは、レポートの正しい書き方の授業でした。大学生活でレポートを書かなければならないことは決して少なくはなく、今までは正しい書き方をしているのかあやふやな状態で書いていました。しかし、鈴木先生の授業を通し正しい書き方、正しい引用の仕方を学び、これからのレポートが大変書きやすくなりました。

そして何より感謝したいことは、鈴木先生の授業の進め方です。丁寧に、それでいて端的に授業のポイントを説明してくださり、分からない箇所を質問した際には理解しやすい様に簡単に噛み砕いた説明をしてくださいました。

鈴木先生の基礎日本語の授業を受けて、本当に良かったと思います。私の友人や後輩にも鈴木先生の授業を受けることを是非勧めたいです。

嶋田萌さん（文学部日本文学科 2年）

基礎日本語の授業では、大学生活では避けては通れないレポートの書き方を、授業科目の文字通り基礎から学べました。これまでに書いてきたレポートでも、意外と分かっていなかったり、あやふやだったりしたルールを一から確認しながら実際に書き、添削が受けられるこの授業では、より良いレポートを書くための力をつけることが出来たと思います。

また、レポートだけではなく、改まった手紙やメールの書き方なども学べ、大学生活全般に役立つような授業でした。

名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第10回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。

●合理的配慮 対話を聞く 対話が拓く



川島聡・飯野由里子・西倉実季・星加良司
『合理的配慮—対話を聞く、対話が拓く—』
有斐閣、2016年

平成18年の国連総会で障害者の権利条約が採択されたことを皮切りに、日本国内においても、平成23年の障害者基本法の改正、平成25年の障害者差別解消法の成立、および障害者雇用促進法の改正など、障害者にかかわる法整備がなされてきた。この一連の流れのなかで、日本社会に初めて導入された概念が本書のタイトルにある「合理的配慮」である。

合理的配慮は、障害者基本法改正の際、第4条2項において、1項の障害を理由とする不当な差別的扱いの禁止につづいて、つぎのように規定される。「社会的障壁の除去は、それを必要としている障害者が現に存し、かつ、その実施にともなう負担が過重でないときは、それを怠ることによつて前項の規範に違反することとならないよう、その実施について必要かつ合理的な配慮がされなければならない」。この一文の理解には丁寧な説明が不可欠であることはいうまでもないが、あえてまとめるとすれば、社会的障壁を前にして実際に困り事をもつ障害者としての当事者と、その困り事に対して合理的な配慮の提供を検討する配慮提供者としての当事者とが、社会における機会平等の実現のためにともに対話を重ねることといえる。

一見すると、このような合意形成のための当事者間の対話はきわめて常識的なものに見え、合理的配慮の法制化以前にも対話を重ねる努力をしてきたと考えられるかもしれない。しかしながら、冒頭で述べたとおり、合理的配慮は導入されたばかりの概念であり、日本社会に欠けていた視座なのである。法制化以前の当事者間の対話による合意形成は思いやりや善意に依拠したものにはすぎなかったのではないかと——。そのような合意形成の仕方は真に対等なものといえたのであろうか——。わたしたちはマジョリティ中心の非対称的な社会構造に自覚的であったのだろうか——。本書はこれまでの経緯を批判的に検証しつつ、丁寧に、かつ多角的に合理的配慮について説明することで、合理的配慮を法制化する正当性を読者に示し、最終的には、合理的配慮の法制化によって社会にもたらされる展望へと読者を導いていく。

国際人権法、ジェンダー／セクシュアリティ研究、社会学など多彩な専門分野を有する執筆陣が描く展望とは、共生の技法としての合理的配慮の可能性である。本書によれば、合理的配慮の法制化によってもたらされるインパクトは障害の領域にとどまらない。これまで対話の道が閉ざされてきた多様な差異をもつ人々へと連なり、差異における新たな出会いの連続のなかで、その都度、新たなコミュニケーション方法を開拓することへといたる。このように差異を統合するのでも、排除するのでもなく、柔軟にコミュニケーションの仕方を変容させ、対話につなぐ力は、対立関係が先鋭化する現代社会において切迫して求められる能力の一つではないだろうか。本書は高等教育機関における障害学生への合理的配慮を考えるうえで有益であることはもちろんのこと、多様性における共生の技法を考えるうえで多くの示唆に富む一冊となっている。(佐藤)

教育開発推進機構彙報

(平成30年1月1日～6月30日)

※肩書きは等は当時のもの

行事

○催事

3月1日：教育開発推進機構教職員研修会「サービス・ラーニングについて」(講師：杉原真晃客員研究員)

○学生オリエンテーション・講習会・試験実施等

1月10・11日：アカデミック・スキルズ講座

1月10日：第6回教員就職ガイダンス(3年生)

1月15・17日：LLC TOEIC®集中講座(1年生 一斉テスト準備)

2月2日：教職ゼミ生(総合・専門)対象 渋谷区立広尾中学校授業見学演習(3年生)

2月5～16日：春期集中講習会(10回)(3年生)

2月9日：TOEIC® IPテスト

3月7～9日：教職合宿 ※国立オリンピック記念青少年総合センター(2泊3日)(3年生)

3月1・8・15・22・29：LLC春休み英語チャット(たまプラーザ)

3月12日：LLC TOEIC®集中講座

3月12日：第2回学内教員採用模試(自宅受験)(3年生)

3月14日：TOEIC® IPテスト

4月4日：直前対策(第7回)教員就職ガイダンス(4年生)

4月6日～：介護等体験2年目ガイダンス(全7回)(2年生以上)

4月11日：第1回教員就職ガイダンス(3年生)

4月13日～30日：首都圏教育委員会教員採用試験学内説明会

4月15日～5月1日：教員採用試験直前集中講習会(4年生)

4月18日：私立学校教員就職ガイダンス(兼東京都私学適性検査学内説明会)

4月18・21日：教員採用候補者選考試験支援奨学金説明会

4月18・25日：LLCガイダンス

4月23日：LLC NetAcademy 2説明会

4月25日：スクールボランティア説明会

4月26日～6月21日：前期教育小論文講習会(木曜日8回+予備1回)(2・3年生)

4月28日：院友教員講演会

5月7日：第3回学内教員採用模試(自宅受験)(4年生)

5月8・9・10日：新潟コメ作りワークショップ(田植え)説明会

5月9・16日・6月6・13・20日：LLC TOEIC®講座(初級、中級)

5月9日～：教職総合ゼミナール(前期6回)

5月10・17・24日・6月7・14・21日：LLC TOEIC®講座(初級、中級 たまプラーザ)

5月14・21・28日・6月11・18・25日：LLC TOEIC® Speaking 準備講座

5月15日：NetAcademy 2 ガイダンス中国語編

5月16日：新潟コメ作りワークショップ(田植え)勉強会

5月19日：TOEIC® IPテスト

5月19・20日：新潟コメ作りワークショップ(田植え)

5月23日：新潟コメ作りワークショップ(田植え)振り返り会

5月28日～：教員採用試験一次対策指導会(4年生)

6月4～9・11～16日：アカデミック・スキルズ講座

6月6日：HSK 4級講習会

6月14日：教育実習東京都公立学校希望者・大学一任者対象申請登録会

6月14日～：介護等体験1年目ガイダンス(全4回)(1年生以上)

6月20日：第2回教員就職ガイダンス(3年生)

6月23・24日：新潟コメ作りワークショップ(草取り)

学生スタッフ研修会・打ち合わせ会等

1月31日：平成29年度後期ノートテイク報告会

2月5日：平成29年度SA(スチューデント・アシスタント)最終報告会

2月7日：学内ワークスタディ報告会

3月16日：平成30年度ノートテイク事前打ち合わせ

4月5日：平成30年度ノートテイク顔合わせ

4月25・28日：SA全体研修

6月13日：パソコンノートテイク研修会

FD活動、教育支援

2月21日：平成29年度「FD推進助成事業(甲・乙)」成果報告会

2月22日：第4回「英語による授業」FDワークショップ「リフレクティブ・ティーチング Reflective Teaching 教師の省察からより効果的な授業開発をめざす」(講師：渡辺敦子氏 文教大学文学部准教授)

3月13日：FDワークショップExhibition「やさしい反転授業教材撮影法」(講師：中山)

3月29日：平成29年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」表彰式

4月2日：平成30年度 第1回新任教員研修

6月16日：平成30年度 第2回新任教員研修(講師：高野裕基氏 本学校史・学術資産研究センター助教)、第1回FDワークショップ(講師：戸村)

出張等

1月12日：全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)2017年度 幹事校・会員校ミーティング・懇談会 於同志社大学東京サテライトキャンパス(新井・中山)

1月26日：川崎市教員等育成協議会（第1回）於川崎市教育委員会（柴崎）
 1月29日：渋谷区バリアフリー推進協議会・第4回区民部会於リフレッシュ氷川（鈴木崇）
 2月10日：横浜市学校院友会 於横浜中華街（小林）
 2月17日：グローバル人材育成教育学会関西大会 於関西大学千里山キャンパス（佐川）
 3月1・2日：障がい学生支援に関するヒアリング 於京都産業大学・同志社大学・京都大学（鈴木崇・大橋・増永）
 3月2日：関東圏FD連絡会 於國學院大學（柴崎・小濱・戸村・中條）
 3月3・4日：2017年度第23回FDフォーラム（大学コンソーシアム京都主催）於京都産業大学（小濱）
 3月13日：JPPF幹事校ミーティング 於同志社大学東京サテライトキャンパス（小濱）
 3月14日：教員免許状一括申請交付受取 於東京都教育委員会（藤井・高橋）
 3月15日：川崎市教員等育成協議会（第2回）於川崎市教育委員会（柴崎）
 3月17日：国際シンポジウム「カリフォルニア大学バークレー校の経営戦略：グローバル化時代の新たな大学の在り方を求めて」於東京大学（戸村）
 3月17・18日：日本の英語教育のための汎用枠CEFR研究会 於成城大学（松岡）
 3月24日：大学教育学会「大学教育研究力向上プロジェクト」検討会 於同志社大学東京キャンパス（委員：戸村）
 3月20日：渋谷区立広尾中学校卒業証書授与式参列（柴崎）
 3月22日：協同出版創立70周年セミナー 於経団連会館（坂入）
 4月20日：東京都私学適性検査説明会（細井）
 4月20日：都内私立大学教職課程事務担当者懇談会第1回幹事会 於国士舘大学（小林・高橋）
 5月11日：院友都立高等学校部会主管者会議 於國學院大學（小林・高橋）
 5月13日：関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会総会 於北里大学（坂入）
 5月19・20日：全国私立大学教職課程研究連絡協議会 於札幌・酪農学園大学（坂入）
 5月19日：大学教育学会第41回大会第1回企画委員会 於玉川大学（戸村）

5月22日：都内私立大学教職課程事務担当者懇談会第2回幹事会 於駒澤大学（小林・高橋）
 6月9日：東北再生「私大ネット36」報告会 於大正大学（柴崎・鈴木）
 6月15日：渋谷川ボランティアワークショップ 於リフレッシュ氷川（東海林・鈴木崇・大橋）
 6月16日：JPPF幹事会・総会・設立10周年記念シンポジウム 於同志社大学今出川校地（小濱）
 6月20日：関東圏FD連絡会 於立教大学（柴崎・小濱・坂入・中條）
 6月24日：院友都立高等学校部会総会 於國學院大學（柴崎・小林・藤井・高橋）
 6月30日：都内私立大学教職課程事務担当者懇談会研究会 於駒澤大学（小林）

講師・研究発表・情報提供

3月7日：「神道と文化」報告会 於國學院大學（アンケート分析担当：戸村）
 3月21日：CRUMP International Seminar American Higher Education in Comparative Perspective（発表：戸村）
 3月27日：日本学術振興会特別研究員への募集に関する学内説明会 於國學院大學（講師：戸村）* 研究開発推進機構事務課より依頼
 5月19・20日：全国語学教育学会PanSIG2018 於東洋学園大学（発表：松岡）
 6月9・10日：大学教育学会大会 於筑波大学（発表：戸村・小濱）

情報発信

・教育開発推進機構ウェブサイトよりセミナー等情報発信（随時）

刊行物

2月：『教育開発ニュース』Vol.17
 2月：『教育開発推進機構紀要』第9号
 2月：『教育開発推進機構ブックレット』第1号
 2月：平成29（2017）年度後期「学生による授業評価アンケート」リーフレット（教育開発センター）

そっ たく どう じ
 啾 啾 同 時

— 編集後記 —

第18号をお届けします。FD推進助成事業の成果報告会、英語による授業に関するFDWSのFDをタイトルにした2つの記事は、多くの意欲的な取り組みがあることを示しています。惜しむらくは、本文にもあるようにいずれも参加者が少ないのです。「成果報告書」によって、今回参加できなかった方にも広く知られることを望んでいます。なお、大学授業最前線で取り上げた「基礎日本語」科目は、FD推進助成事業にも取り組んでいます。また、授業評価アンケートを活用したベスト・ティーチング賞の受賞者の記事もあります。このニューズレターを通して教員の努力を共有できればと思います。（佐川）